

平成 1 5 年 7 月 1 5 日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土資料室（青梅市駒木町 1-684 0428-23-6859）

友田方砂地区の供養塚の祭り

友田町一丁目の方砂(かたすな)は、青梅市の東南端にあたります。方砂の北側を西から東に向かって大荷田川が、多摩川へ流れ込んでいますが、その流入地点近くの大荷田橋から大荷田集落へ向かう道があります。その道を 50m ほど遡ったところの右側に、「供養塚」と呼ばれる小さな塚があります。

平成 15 年 5 月 25 日、地元の有志の人たちによって、「供養塚」の祭りが行われました。

供養塚は、幅約 17～18m、奥行き約 10m、高さ約 3m で、玉石の石垣に囲まれています。塚の右寄りの石段を登ると、正面に自然石を刻んだ供養碑が建てられています。供養碑は、高さ約 40cm、幅約 30cm で、右側に「寛延 3 年(1750)」、中央に「日本廻国納経塚」、左上に「庚午 3 月」、その下に「行者、三良兵衛、金左工門」と刻まれています。

江戸時代のある寒い日のこと。ひとりのみすぼらしい坊さんが、この辺りを通りかかりました。日が暮れてきて、坊さんは一夜の宿を近くの家に求めましたが、あまりに汚い坊さんの格好に、その家では断ってしまいました。次の朝、その家の人表戸を開けてみると、軒下で坊さんが冷たくなっていました。家人は、驚くと共に汚いからと宿を貸してやらなかったことを後悔しました。後でわかったことですが、この坊さんは大変徳の高い人で、日本全国を廻りながら布教などをしていたということで、さらに驚きました。

集落では、そんな特の高い坊さんを粗末にして、祟りでもあってはいけないということで、当時、大荷田川の中洲だったこの場所を塚として手厚く葬り供養したということです。「行者、三良兵衛、金左工門」とあるのは、この石碑を建てた人の名前だということです。また、この供養塚の近くで自殺した人があり、その人をも一緒に供養したということも伝わっています。また、これらのことと関係あるかどうか分かりませんが、供養塚の右下隅に一体の地蔵尊も祀られていますが、年代の判読はできませんでした。

方砂地区では、戦前から毎年、供養塚の祭りを行ってきましたが、戦後一時期、途絶えていたことがありました。すると、その時期に、あまり良くないことが起こったので、また復活し、以来 50 年ほど続いているということです。以前は、青梅大祭のすぐ後の日曜日に行っていましたが、現在は 5 月の日曜日に行われ、方砂の有志約 50 名ほどで運営されて

います。前日に塚の周りの草刈りをし、当日は 12 時ごろから 4 時ごろまで、塚の上に敷かれたシートにごちそうを並べて歓談する慣わしになっています。10 数年前までは、お雛様やダルマの古くなったものを持ち寄り、塚の上でお焚き上げをしていましたが、最近は行われていません。

また、この塚の左側には、「出世不動」の祠(ほこら)も併設されていて、同時に祭りが行われています。この出世不動は、10 数年前まで大荷田橋の長淵寄りのたもとにあったものですが、道路改修などによって、ここに移築されました。祠の中には、高さ約 30cm ほどの不動明王の木造、両脇にセイタカ童子、コンガラ童子の木像が安置されています。「出世不動」の由来については不明ですが、建てられていた場所と関係があるのかも知れません。元の場所は、友田町一丁目 648 番地に当たり、旧村道が大荷田川と交差する手前です。

以前、大荷田川は、供養塚の上流で南側に蛇行し、供養塚を挟み込むようにして流れ下っていたということです。大荷田川は小さい川であるにもかかわらず、あっという間に大水が出て多摩川へ流れ込む付近はたびたび土砂崩れなどに襲われましたが、現在は砂防工事の完備によってその心配もなくなっています。

今年の祭りが行われた供養塚は、サクラやケヤキの若葉のドームの中に心身の汚れが祓われるような心地良い 5 月の風が吹き抜けていました。

話者 友田一丁目在住
加藤静一郎氏、村野洋一氏
(文責 小川 秋子)



供 養 碑